

坐に先だつて

坐禅するには正しい方法が不可欠です。つまり的を得た着眼点が必要です。功夫の要点が如実に明らか人は、後は実践あるのみですから、そのまま坐禅を続けてください。そうでない方のために簡潔に申し上げます。

「道」「法」を得るには、成り切ることが第一です。成り切るとは、皆さんの経験から言いますと、受験勉強の時など、差し迫った時間内で事を済ませようと思うと、どうしても一生懸命にならざるを得ない。一生懸命の時は精神が高密度に集中していて、心に余分なものが有りません。二時間三時間があつという間だった筈です。それは一生懸命になり真剣であればあるほど速く、知性も感性も意志も、目的に統一されて一つに成っているからです。本当に一心不乱であれば雑念は自ずから無いのです。だから勉強のみです。勉強しておることも忘れ、しておる自分も忘れて無くなっているのです。これを「成り切る」と言うのです。ですから皆さんは既に着眼の基準とも言える大切な体験を、何度もしているのです。その時のように、真剣に、一心不乱に没頭すれば何時でも成りきれると言うことです。

純一になれば余念は自然に無くなるのです。自我も拘りも雑念も無いのです。本当に徹し切ったら煩惱の本である「隔たり」が取れて無くなるのです。ですから「今」一つ事に一心不乱になつておればいいのです。

したがって坐禅は難しいことをするのはないのです。単純な事を単純に繰り返し繰り返しやつておればよいということです。その時、雑念、煩惱、本能、感情が出てきても、根本的に無視して、一心不乱に単純な一呼吸を続けておれば、やがて知情意が治まり、心のクセが取れるのです。

何かを求めたり探したり、知るためじゃない。何かを得るためでも無いのです。ただ自分の心の癖を取るだけです。あつちに、こつちに飛び廻つて波風を起こす癖。心と身が隔たっているから、このように心が勝手に飛び回るので、「隔たり」を取ることで癖を取ることになるのです。これが「囚われる自己を超える」ことなのです。そのためにここでは、一息になり切ってください。一息とは、吐くだけ。吸うだけ。これを飽きもせず、ただ単々とやるのです。一心に成るに従つて心の拡散、心の散漫癖が取れるのです。真剣に、真面目に、吐くだけ。吸うだけ。本気になって、一呼吸に没頭してください。

たった今から本真剣で一呼吸に没頭してください。なんでもないことに一生懸命になれる人が真実の人です。真剣にすれば誰でも成りきれるのでありますから。では。

正法眼蔵 有時の巻 提唱 第五回（最終回）

有時の巻はこれが最終回であります。先ず読んで見ましょう。

本文

「到は到に罣せられて不到に罣せられず、不到は不到に罣せられて到に罣せられず。意は意をさへ、意をみる。句は句をさへ、句をみる。罣は罣をさへ、罣をみる。罣は罣を罣するなり、これ時なり。罣は他法に使得せらるといへども、他法を罣する罣いまだあらざるなり。我逢人なり、人逢人なり。我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざるには、恁麼ならざるなり。又、意は現成公案の時なり、句は向上関板の時なり。到は脱体の時なり、不到は即此離此の時なり。かくのごとく辨肯すべし。有時すべし。

向來の尊宿ともに恁麼いふとも、さらに道取すべきところなからんや。いふべし、意句半到也有時、意句半不到也有時。

かくのごとくの参究あるべきなり。

教伊揚眉瞬目也半有時、教伊揚眉瞬目也錯有時、不教伊揚眉瞬目也錯錯有時。

恁麼のごとく参来参去、参到参不到する、有時の時なり。

正法眼藏有時第二十

仁治元年庚子開冬日書于興聖宝林寺

寛元癸卯夏安居書写 壞牋」

提唱

「到は到に罣せられて不到に罣せられず。」

「到」とは至る事です。至った時は至った時の様子しか有りませんね。「罣せらる」とはさえられる。ここでは同化一体の意です。「罣せられず」とは、関わらないと言う事です。到は到でしかないので、不到とは関わらないと。白は黒に非ず。昼は夜に非ず。有りの俣の事が大切なのです。白は白に白させられている様子です。単純化も一切同じです。立っておる時は立つに使われているのです。これを活動に活動使されるといいます。その物自体に成ることです。

つまり私達のこの身心の働きというものは、その時その時の縁の様子であって、歩いておる時は留まっておる時ではない。寝ておる時は起きておる時ではない。歩くは歩くに歩くさせられておる。呼吸に呼吸させられておる。その事を「罣せられる」と言うのです。今、その事だけ。それしか無いので、「罣せられず」、関わらないと。

「不到は不到に罣せられて、到に罣せられず。」

これも全く同じです。不到は不到に不到させられているので、到とは関わらない。絶対にこれだけだ。本来縁のみで他に何も無い、と言う事を徹底知って貰いたい為にここまで説いているのです。慈悲以外何者もないのです。

歩くばかりになったら、歩いておるとか止まっておるとか言う自己は無い。相対的な意識などは無い。到、不到に関わら無いから、動きながら動く者が無い。有りながら無い。これが真相であり今の様子であるぞと。

「意は意をさへ、意を見る。」

我々は感じたり思ったりを自由自在にするでしょう。意が意をしておるだけです。本当に意をしてい

る時は意は無いのです。簡単に言えば、意に意は無いのです。この様子を「意は意をさへ、意を見る。」と言うのです。この「意を見る」の見るは、見聞覚知の見るではありません。意自体である、と言うことです。だから衝突も混乱も起こらず、自由自在に意が意をしているのです。

何を思おうと、何を感じようと、意には一切関係ないのです。思った時は思った時です。つまり、それ自体だから終わった時です。「今」「今」、始終同時です。前後が無いと言うことです。意それ自体、これを平常心是道と言うのです。では、なぜ私達は日常思った事や考えた事、人に言われた事や見たことの一々に引つかかって苦しむのか。

それは思った事を留めてしまうからです。思った事は思った時、既に終わっておるのに、その事を留めるもう一つの自分がある。影の自分がある。そうしてしまう心の癖があるからです。それをそれと認め眺めてしまう心の癖。良いとか悪いとか、色々理屈を付ける自分。影を作ってしまう自分。それが有ると記憶装置に残るのです。だから情報としてストックされたものが、縁に無制限に反応して顔を出して来るからです。

意は意をしている時しかないのにも関わらず、この意に過去の情報が反応する形で余念として起こるのです。これが囚われであり問題が起こってくる構造です。

即処その場で考える、思う、思惟する。これは人間の特性である知性の、自然な作用です。ですからこれが無くなったり鈍化したら、人間ではなくなるのです。

縁に依じて思うこと自在、考えること自在。意が意にさえられない。次の意にも前の意にも関わらんでしよう。「意は意をさえ、意を見る」と。その時の意ですよ。その時の働きですよ。その時の心の様子自体が意であると言う事です。次ぎも同じです。

「句は句をさへ、句をみる。」

句は意思表示、表現、言葉、その時限りのものです。美味しかった、綺麗だなはその時の様子でありその時限りのものです。言葉ではあっても言葉に何もないのです。美味しい、綺麗以外の何者でもない。美味しい、綺麗が句になっただけです。それが句です。宝鏡三昧に、「婆婆和和、有句無句」とあるでしょう。赤ちゃんが、意味無くバーバー、ワーワーと発する。それ自体と言うことです。それ以外の何者でもないでしょう。

句を認めると概念となり、過去のデータと重なって問題化するのです。「只」句。句そのもの。「只」言葉。言葉そのもの。耳の俣、眼の俣。見聞覚知の俣が「道」「法」です。これが「句は句をさへ、句をみる」の真相です。

言無展事。語不投機。承言者喪。滯句者迷。(言は事を展べることなく、語は機に投ぜず、言を承ける者はうしない、句に滯る者は迷う。)言句にはひとかけらの事実はなく、言葉ではどうしても学人に真実を伝えることは出来ぬ。その物自体になつて冷暖自知の外はない。言を承けて云々し始めたら最後、道を失う。言葉で分かった者は全て知解情量であり妄覚に過ぎぬから、句にも囚われたら迷道する。と古人は明言しています。次ぎも同様です。

「礙は礙をさへ、礙は礙を礙するなり。」

「礙は礙をさへ、礙は礙を礙するなり。」とはそれ自体と言うことです。流水が大きな岩に阻まれる。如何にも水は岩に妨げられているようであるが、水も岩もそのような意はない。礙は人にあつてその物自体には無いのです。礙の時はそれしかない様子が自然であり「道」「法」です。それ自体と言うこと

です。其れが其れをしていると言うことです。だから価値があるのです。塩は塩の辛さがあつて塩の価値があり、砂糖は砂糖の甘みがあつて砂糖です。だから塩は塩にさえられて塩たらしめておる、砂糖は砂糖しておる時が仏です。砂糖が砂糖にさえられる、砂糖させられていると言う事です。塩も砂糖もそれ自体の様子であり、辛い甘いのは無いのです。目が目をしておる。耳が耳にさえられて耳をしておる自然の様子が「道」「法」です。それが「礙は礙をさへ、礙は礙を礙するなり。」と言うことです。

「これ時なり。」

全て時の様子です。だから疑義せずに素直に縁の尽に「只」従い去ればよいのです。なのに自己を運ぶから問題が起こるのです。時そのものに成らず、抽象的に定義しようと、意に意を重ねるから「今」と遠くなり分からなくなるのです。時は「今」を横から眺めた流動的な作用の様子です。「今」は一秒過去も無く一秒前も無い。この瞬間が「今」です。時その物です。

「時」と言えば「今」が過ぎた過去も時であり、今の「今」も時であり、未だこない未来の「今」もひつくるめて「時」です。整理をしようならば、時は過去も現在も未来も範疇に入ってくるので、そんな時はないのです。つまり時とは概念として眺めて起こる観念世界のものだということなのです。

そうすると我々を含めた全ては、果たして過去なのか現在なのか未来なのか、皆さんどうですか。「今」に決まって居るではないか。その「今」が怪しいから問題なのです。

では金剛經の「過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得」とは何かです。此処の所がハッキリしたら良いのです。さあ、分かったかどうか。返答せい、と言う最後の詰めです。捕まえるべき実体は何も無いのが時です。これが有時の正体です。「これ時也」と。本当の「今」が明了了となるまで行じ切るしか時の真相を体得することは出来ないぞ、というのが道元禪師の本意です。

「礙は他法に使得せらるといへども、他法を礙する礙いまだあらざるなり。」

この礙も、さえられる、その物に同化して一つになる事です。「他法に使得せらる」の「他法」とは別の事という意です。「使得せらる」とはその物に使われることです。立っておるのに、坐らねばならぬ場合など、縁に応じて転じていく様子の事です。その物にその物をさせられていることです。起きて寝るまで縁に従つてコロコロ自在にやっておるけれども、他の時と違うから礙する事がないのです。足とて右と左と前後して作用するが、決して前にも後にも礙すことはない。見る時も、こっち見たらこっちしかないから、混乱することはありません。味も同じです。どんな物も喉を通過したらパッと消える。どんな物が来ても自由自在に味は味に使得(使われて)せられて罣礙なし。何ものにも妨げられていませんよ。何に執着しておるんですか、何に囚われておるんですか。それは真実を知らないからだぞと言うことです。

立っても坐っても、寝ても起きてても、それらの一切が絶対に衝突無く作用しているのは、「他法を礙する礙いまだあらざるなり。」だからです。他法も縁、礙も縁、使得も縁です。縁が縁を妨げる道理はない。水が水を濡らすことはないでしょう。その縁に拠つて、「今」「今」、仮にそう現成している働きを「使得せらる」と言っているのです。

我々が気が付いた時には人間になつてたでしょう。人間に人間させられたのです。その時には既に目があり耳があつて、全体この様子でした。自分だと知った時にはもうこうなつちやつてたんです。だから知らずして心も体も全体が罣礙無く、礙すること無く働いているのです。知るから罣礙し礙することになるのです。知らなければそれ自体で、罣礙も礙も何にも無いから一つも問題は起こらないのです。大切なのは、その物自体には余物が全く無いということ。その事を本当に体得するのが禅修行の目的で

す。つまり本来は純粹無垢だと言うことに気付けば心底から安心できるのです。心も本来はそうなのですが、概念を形成してそれに囚われてから本来と「隔たり」を起こしたのです。それが「道」「法」であり真相なのに、それがそのまま肯えないのが心の癖です。これを取るための坐禪です。内容は次も同じです。

「我逢人なり、人逢人なり、我逢我なり、出逢出なり。」

「我れ人に逢うなり。」皆さんも人に逢うでしょう。さあ、人に逢うとはどういうことか、とここで又風なきに波を起こして、真実に迫る道元禪師独特の文法です。我が人に逢うとは、人が人に逢う事であり、我れが我れに逢う事だ。「出」は離れると見るも同じです。出るは出るされる。離れるは離れるに離れるをされている。こう言うことなんです。

前出しの二論は分かるが、我れが我れに逢うとはどういう事かです。ここは境界辺ですから論理的であろう筈はなく、体得底にして初めて分かる世界です。つまり自己が無い様子を言っているのです。自己が無ければ「隔たり」が無い。全宇宙は我れです。天地と同根万物と一体です。この消息を自覚したら、この内容がはつきりするのです。自他不二も、入我我入も「隔たり」の無いことです。

眼を開いた時にはもう其の人です。何であれ目にちゃんとある。目にあることを知らないことが、既にその人になっている証拠。と言う事は自分と縁とは常に一体と言うことです。だから自分が人に逢ったと思っておるようではあるが、それはそのまま人が人に逢っておる時で、人に逢っておる時とは、そのまま自分が現れた姿です。皆さん目を開いたらそのままが全部自分の世界なのですよ。

だが「出逢出なり」を理會すると混乱しますよ。「出」は動詞とも名詞とも副詞にも形容詞にも解釈できるから、囚われると限りなく知性は混乱します。だから禪を決して言葉で分かつたしらないことです。いよいよ迷走し混乱するだけです。「出」して「出」となるので、それを「逢う」と言うたのです。「出」しなければ「出」は無いのです。「出」も「不出」も時節であり有時と言うことです。

洞山大師が大悟した時の「過水の偈」に、「云々。処処渠に逢うを得たり。渠今正に是れ我。我今是れ渠に不ず。云々」とあるも同じです。「隔たり」が取れてみると、一つでありながら個々として厳然とその用を異にしている、その真相がはつきりしたと言うことです。要するに自己が無くなったら全てが領けたのです。本より眼横鼻直だったと合点したのです。

「これらもし時をえざるには、恚慳ならざるなり。」

もしそういう時、即ち時節がなかったら、この様な事はあり得ない。物が下から上へ落ちる事もあり得ない。いつも時だから、川は上から下へ流れないと言う事はあり得ないと言うことです。

「又、意は現成公案の時なり、」

意は縁に依じてパツと現れて、そしてちつとも残っていない。現成とは今の様子です。皆さんが知らずして自在に立ったり坐ったり、トイレに行ったり手を洗ったり水道を開けたり閉めたり、縁に依じて自由自在にやっているのでしょう。此の事が意の現成です。公案とは公布の案読で、私情理屈を離れた「道」「法」のこと。今が本来の様子そのままだから、この事をしかと自分で極めなさいと言う事です。

「句は向上関楯の時なり。」

句は先程ちよつと説明しましたが、言葉であるとか言句であるとか、広げて言えば心の働きであり意と言うも同じです。つまり道理と受け取ったら一番良く分かります。関楯とは珍しい言葉ですね。これ

はカラクリとか機関のことらしいです。歯車と心棒とが絶妙に噛み合わさつて作用をし、大きなエネルギーを生んだりする装置の意です。こうした装置によって機械も動いたり止まったりする訳です。私達の心身もカラクリの機関のように自由自在になるようになっており、いつも間違ひなく自分の目的を果たしています。吐いたら吸うように、お腹が空いたら食べるように、疲れたら眠るように、食べたらずやうに、見聞覚知全体がちゃんとした働きをするように成っている。まことに便利良く確かに出来ている。これを閑候と言うのです。意によってこの道理を知り、縁に従つて自由自在に「今」を操り、目的に向かつて向上する道であり時であると。

「到は脱体の時なり、不到は即此離此の時なり。」

到とは到る。今このように現成しておる事です。既にそのものをしておるのだから疑う余地はない。迷える筈がないじゃないかと言うのが「脱体の時なり」です。そのものずばりの時だと。「不到」は到らずです。文字から行くと到の反語ですから、理としては対極語です。ところが全て無語中の有語、有語中の無語ですから、概念としての対極的意味は全くないのです。到と言うも不到と言うも「道」「法」のことですから一つ事を言っているのです。そもそも本来には到、不到は無いです。人が到、不到を付け有無や美醜や価値を付けるだけです。「今」の現成底を、到と言おうが不到と言おうが全く関係ないことです。それらをだから有語中の無語、無語中の有語と言っているのです。

到を脱体と言つたので空無に落ちる危険がある。円満を計るため、不到の句を借りて「即此離此」で補つたのです。即ち此れその物です。でありながら、此れを離れておる。縁の寄せ集めであつて実体はない。意からも句からも、到も不到も離れていると言うことです。

ここに説明を加えて置きます。目は目をしてます。自由自在に公平に、囚われなくやっております、而も目には何も残つてない。この公平さ、留まつてない所が「即此離此」です。今が今でありながら、もう今でなくなつておる。だから「今」が自由自在なのです。

今と言う今なる時はなかりけり「ま」の時来れば「い」の時は去る

とあるでしょう。心が纏れておるように見えても、真相は既に離れている。終わっている。ちつとも残っているものはないので、決して纏れたりほしくないのです。

では迷いの根源は何かと言うと、自我です。仮想世界を想像する知力を持っており、過去や未来を貪瞋痴の赴くままに描き、自我がそれに囚われるから苦しみ迷うのです。知力は知力のまま、計画を立てるべき時は綿密に一ミリの差もないように活動使すればいいのです。知力は大切な光明です。が、それはあくまで観念世界に過ぎず、実体は何も無いので執着したら知性が混乱すると言うことを本当に知る必要があるのです。純粹知性として作用するためには、純思考系のみを機能させて、感情を加えないことです。考えるときは考えに徹して余物を挟まぬ事です。そのための坐禅であり修行なのです。

「かくのいづく辨肯すべし。」

だから「かくのごとく辨肯すべし」となるのです。今辨道する、一所懸命坐禅しなさいと言うことです。この辨の字はね、弁道の本当の辨の字ですよ。この中に刀を入れると、左右に切り分ける意味になります。言を入れると、言葉で白か黒か、正しいか正しくないかを言い分ける意味となり、まさに弁護士の辯の字です。力が入ると勉める、努力する意味になるのです。語源から言えば、女性が赤ちゃんを産み分ける分娩の時、懸命に勉める意です。中の字がちょっと違つたら意味が大変異なつてしまいます。これは本当に努力することです。肯は承うこと。努力をして自らうけがうこと。即ち体得することを辨肯するというのです。

「有時すべし。」

本当の今を体得せよと。

「向來の尊宿そんじゆくともに恁麼いふとも、さらに道取すべきところなからんや。」

向來とは、今までの多くの人達と言う意です。尊宿とはお坊さん。今までの色々な高德のお坊さん達が、この有時と言うもの、時と言うもの、今と言うものを色々に論じたに違いない。そして、誰もが、更にもっともっと深い意味合いが、外にあるかも知れないぞと、自己を運んで詮索したに違いない。

「いふべし、」

今少し自分の言い分がある。道の資助になるはずだから是非いわせて欲しいと。道元禪師最後のまごめを示唆しての助辞です。

「意句半到也有時、」

「意句」は心も言葉もですよ。「半到」は出来合い、間に合わせと言う程の意です。そんなことだから、満足であるかどうかは分からないが、半分は半分なりにこれが今の様子である。

「意句半不到也有時。」

意も句も半分か或いは到らないとしても、共にそれ自体が又今の真実の様子である。

「教伊揚眉瞬目也半有時、」

眼を開けたり見たりする。それがその時の出来合い、間に合わせだったとしても、それもまたその時の真相である。

「教伊揚眉瞬目也錯有時、」

彼が眼を開けたり見たり（教伊揚眉瞬目）したことが過ちであることもある。けれどもそれもそのまま真実の今の様子である。

「不教伊揚眉瞬目也錯錯有時。」

不教伊揚眉瞬目眼が、全く間違いであったとしても、それも有時であるぞと。畢竟心底は、今の様子は全て真実の丸出しであり、有時の働きその物である。だから認めたり道理で知ろうとするな。一切心に止めず、今、只、須く縁のままにサラサラやっ行って行けよ。それが有時の真相を体得する道である。今の様子のままで良い。「只」淡々と縁に従い去れよと。それで次の句になるのです。

「恁麼のごとく参来参去、参到参不到する、有時の時なり。」

斯くの如く参じ来たり参じ去るのも、参じ尽くすことも、参じ切れないこともあるであろうけれども、それも皆有時の様子である。時の様子であり時節である。有時は尽きるものでも壊れるものでもないし、行ったり来たり、離れたり重なったりするものでもない。何時でも、何処でも有時である。これがまごめです。

正法眼蔵全巻は天才道元禪師が三段論法などを存分に駆使された文言の塊です。言葉について廻つたら命取りになります。ただ真意を尽くそうとならば、根源である即今底に参じ去ることです。打坐三昧が有るそのものです。本当に打坐してその人になれと言うことです。「只」坐禅するしかないぞと。誰か有る時ならざる。参。

無門慧開曰く、西来直指。

西来直指。

事因囑起。

事は囑するによつておこる。

撓聒叢林。

叢林を撓聒（によようかつ・騒がせる）するは、

元来是汝。

元来是れ汝。

元光希道 謹曰 打頭百拜

茶礼会

参禅者A・・ 鎌倉から伺いました川村と言います。老師が未だお若い頃、大智老尼のご指導を受けて最後の修行をされた時に、よく分からないんですが構えが取れないと言うことで修行されたと言つてます。それについてどのような工夫をされたのか、お聞かせ願えるならと思います。

老師・・ 構えと言うのは狭く取れば拘りですが、娑婆心に落ちないように、菩提心を旺盛にして道に進む時は、即念を護らねば成りません。これが努力することであり、構えて落ちないようにしている修行の様子です。初めは誰もが二人連れですから、構えないとどうしても癖の自己、囚われの自己に振り回されてしまい、道を見失うのです。未だ修行の入り口の所では、しっかりと構えて「今」「只」努力するしかないのです。

ここが間違いやすいところです。何もしないのが本来の修行だとか、二人連れになるから構えてはいけない、などと言う理屈を持つと、我れない所、今、淡々とやれる着眼がなかなか得られなくなります。道理が分かるとこのような邪路に陥りやすいので良く気をつけてください。

初めの間はしっかり構えて、娑婆に落ちないように、今を守ることです。拡散が収まるにつれて「今」しかないことが分かってきます。そうなれば構えることが非であると気付きますから、自然に構えなくなります。

要するに即念が逃げる間は、徹底構え、しがみつき、即念に囚われ切つてやらねば弾けて行きませんよ。構えを取れ、と言うことは、徹底構え尽くして、構えが無くなる迄やれと言うことです。色々な法を沢山聞きすぎると、頭が先行して実地が出来なくなります。「今」、実を大切にしている修行者になつて下さい。

そういうことに速く気が付くと良いのですが、道理が分かってくるとなかなか破れんですよ。師匠の側に居ると、実地を踏ませますから知らん間に向上して「今」となり、構えていた自分が落ちていくのです。それが師匠の側に居る幸せというものですよ。

未だ未だ離れる時間が多いのでしたら、構えてしがみつく必要があります。しっかりとやって下さい。自ずから構えが要らないようになりますから。これは自然現象で、実地の努力によるのです。

参禅者A・・ それでもう一つお伺いします。それは所謂悟前の修行と悟後の修行と言うことでしょうか。

老 師・・ 未悟ですから。悟りとは遠して遠しです。悟後の修行というレベルの物ではないのです。修行のない修行によく辿り着いたと言うところですよ。今に気が付いても、徹し切つてなければ何時でも今を見失つてしまう。癖の自我が生々しく直ぐ側におる。つまり二人連れですから。

それで悟る道として、徹し切るまでは悟りとか何とかは忘れてやらなくちゃならないんです。と言うことは、本当に徹するには、何か有ったら駄目なものです。迷いの自己、囚われる自己を超えるには、徹し切つて我を忘れきるより方法は無いのです。道元禅師も「心意識の運転をやめ、念想観の測量をやめ」と言い、「作仏を図ること莫れ」と言われているでしょう。悟るとか見性するとか仏になろうなどと鶉の毛ほども思つてはならぬと。間違わぬようにしてください。

十牛図で言いますと、七まで来ますと、前後の無い「今」がはつきりして努力さえしておれば日常「只」が継続出来ます。だがそれは努力する自分が未だあるという世界です。いや、努力する必要があるのです。八に至つて初めて空の真相が体得できるのです。つまり「隔たり」が取れて迷いの自己が落ちたと言うことです。これにより真実世界が現前する。その消息が一大事因縁であり、衝撃的展開が起こるのです。その自覚症状を悟りというのです。ですから八に至つて初めて悟りという言葉が許される。それまでは悟りという言葉は使わないことです。

参禅者B・・ 見性とは又別でしょうか？

老 師・・ 臨済で言う見性とは、十牛図でいきますと、牛を見つけたところで見性と言います。本当はそれから牛を捕まえて、自己と牛とが境目が無くなるまで徹する。つまり成り切つて自己を忘じ切るまで錬つていかなければ「道」「法」は得られないのです。本当の禅定にも至っていないところで見性と言つてしまうと、修行者はそこからの努力する方法が分からなくなつてしまい、結局は道成らずです。

それでも何もかも分からなかった時点から言えば、それも見性と言えるかも知れません。何も出ない一瞬は誰にも在りますからね。それを見性としてしまうと、真実の法は遠して遠しです。それを見性とは言わないのです。祖録では「省有り」と呼んでいるところですよ。少林窟道場に来られた人はみんな辿り着いていますが、その程度のところですよ。となるとみんな見性者ですが、誰も自分は見性したなどと思つていないでしょう。確かな覚証が無く、満足感も何も無いからです。

今日の禅門に於いては、残念ながら本当の安心を得るために訣著を付ける坐禅をする人が極めて少なくなりました。見性とか悟りを追究する人は殆どいないのです。居てもその程度を見性だとか悟りと言っているようです。残念ですね。これでは法が伝わらないですね。貴方のように見性を云々する人は居ないです。法すら論じる人が居なくなりました。言えば変人扱いされて終わりです。いよいよ正法断絶の時が来たなと思えますね。

理解すると言うことはその事に興味が深まることですから、仏法を論ずるときには大いに論じて、その大切な宗旨を深めてください。仏法を論ずることは大いに功德有りです。釈尊や祖師方が何に苦心されて、何を得たかが次第に見えてきますから。

「あつ、そうか。その境界が悟りなのか。そう努力しないと悟れないのか。「今」一瞬を大切にしなければ、本当に自分がわからないのだな。前後の無い瞬間へ成り切るのか。此処を参究すれば良いのか。徹すればその時節は自ずからやつて来るんだな。」

と言うふうな道を論じ方法を極めて下さい。そのまま真摯に日常底を行つたらいいのですから。ただ唱えたり読んで理解したりして済ませるのではなく、日常の茶飯事を着眼としてやつたら自然に道が明

らかになつてくるのです。そうなれば占めた物です。

「あつ、ここだ。釈尊もここが分かったときは嬉しかっただろうな。今の自分のように楽になつただろうな。」

と言う法悦が有り、自分が分かつてきます。「今」はいつも「今」であり同じですからね。みんな同じ努力をして、同じ経過を辿つていくのです。「今」に二つ有る訳じゃないが、「今」が分からない以上は迷いですからね。迷つて、囚われて、拘つておる自分がほめていく度に、真実の世界が見えてきます。その度に楽になつていきます。法が明らかになつていくんですよ。

世話人・・・外に何かご質問のある方は、遠慮なくどうぞ。

参禅者B・・・今日は本当に有り難うございました。今日の提唱で、「今」は前後裁断していると聞かれましたが、現成公案の中に、「薪が燃えて灰になるに非ず。云々」に於いて、薪と灰とは別だと言うことですが、火が付いて、それが燃えて、と言う因果関係が有ると思うのです。それは「今」起こっていることと、前後際断されていることが、どうも良く分からないと言いますか、矛盾してないかなと思ふのです。そこを・・・

老 師・・・因果を語ることは仏法を語ることに同じです。だからこそ因果を論ずる意味があるので。「道」「法」はどんな現象も日常の様子も決して別物ではありません。ですから特別視する囚われの自己が問題なのです。即ち触発的に作動させられてしまう心の癖のことです。

例えば、お腹が空いたと言う気持ち湧いてくるのは、因果か因果でないのかと。因果と矛盾しているか否か。風無きに浪を起こして仏法を論じてみることで。

お腹が空いたという自覚は、理由無くしては有り得ない。縁が熟したら、つまり時節が来たら自ずからお腹が空きます。この現象自体は誰のせいでもなく、自己も囚われる何も無い無為自然の働きです。そして「お腹が空いた」という自覚症状が有ります。これも全て因果の様子です。煩惱ではありません。お腹が空いて来るまでの時間があり、その間に生理的原因があつて空腹感をもたらすわけです。それから初めて「お腹が空いた」という知覚が起こるのです。知性による認識というか自覚作用が起こる。

薪の時、つまり薪自体の時は明らかに他の縁が無いので何事もない。着火したら他との因果関係が発して、その時の関係した「今」が結果として生じてきます。熱を発し光り輝き、煙も出ることでしょう。ただ自然の因果の道理に従っているだけです。燃え尽きて、それらの一切は消滅します。縁が無くなったからです。自然は縁が有るとも、無くなつたとも言いませんよ。有無は人間が付けているだけです。それが自然であり「生も無く滅も無い。増減も無い」。これが普遍の真理です。これを仏法といい仏性と言うのです。それがその時の状態であり様子です。つまりそれ自体が真相だと言うことです。即ち、薪その物、燃焼その物、灰その物のいちいちが全て真実の姿です。有時です。

鉄に塩が附着すれば忽ち錆びてしまうが、逆に酸化作用をもたらす動機が無ければ錆びない。縁が有ればどのようにも成つていくし、縁が無くなれば無いように成つていく。何れも、何処を捕らえても、縁の俣の真実を現成していますから、囚われも汚れもなく自由自在です。仏でない者はないのです。常に仮の姿でありながら、「今」それが真実の様子であつて外には何もありません。永嘉大師の證道歌に「幻化の空身即法身」とちゃんとあるでしょう。因縁所生の法とも無自性空とも言われるのは、真実がそうだからです。縁次第でどのようにも成るのは、その物に固定した実体が無いからです。で「空」と言うのです。

柿の種をどんなに解析し分析しても、柿の様子などは一切ありません。幹も花も実も何も無いのです。これに大地という縁を与えると、忽ち因果関係が出来たわけですから即発動し、時間も含めてあらゆる大地との関係から柿に成つていくのです。

その物自体の単体では、それ自体でしか無いのです。縁が無い限り因果関係は無く、何事も起こらないのです。全てがそうなのです。私達自身がその通りの存在です。ゲンコツを振り上げただけでは何も起こらない。だから善悪を論ずる動機もないのです。そこに人が居て、振り上げたとしますね。人に向けたら恐怖感を与え問題となります。これを合意の本に肩を叩けば善となる。けれどもそれが合意という縁なしに叩けば、それなりの結果が生ずると言うことです。道元禪師は「善悪は時なり」と言われたのも、そのもの自体は善悪を超越した存在だからです。喧嘩も戦争も全て因果関係であり縁次第と言うことであり、愚かななれの果ての姿です。

皆さん現実に今ここにいらっしゃるが、これは原因なのか結果なのか。過去から見れば全て結果として現れた様子ですが、未来から見たならこの様子は原因と言うことになるのです。これから先の互いの関係性については全く未知です。が、全て因果同時です。何が発展的になり結果が出るかは分かりません。けれども厳然と「今」が現成している限り、その結果は絶対に現れるのが宇宙の掟であり因果の法なのです。

先程の有時の通り、「今」と言えば前後際断底の「今」です。しかし「時」は「今」も時ですが、過去も、現在も、未来も時としてくくられてしまうのです。「今」は「今」しかないのです。

だから薪の時は薪の「今」しかないのです。燃えている時は燃えている「今」しかない。灰の時は灰の「今」しかないのです。だから薪が薪に止まらないと言うこと、縁次第で自由にいかなる姿にも転じていくと言うことです。固まった実体がないが所以にです。これを空というのです。

参禅者B・・ 因果関係は線じゃないけれども、線は点の集合だと言いますが、点は前後が無いと言いますか、連続しながら連続していない。そのように理解してはいけませんか？

老師・・ そうです。そう理解して頭を整理しておくことです。もう少し詳しく言うなら、点があったら場が有るのです。何かがあったら無限に細分化出来るし、限りなく拡大もあり得るのです。「今」は全く前後が無いから、縁次第で自由に転ずるのです。眼に於いてもそうで、見る「今」、点も何も無いから、一切手続き無しに自在に見ることが出来るのです。点があったら、先ずその点をはずしてからでなければ次が見られないことになるでしょう。この前後の無い「今」が全てなのです。「面白いでしょう。

だから仏法を論じだすと、このように精細精緻を尽くしきった世界なので、果てしなく道理が広がります。でも釈尊が二千六百年前に、きちっと宇宙の根源、真理を解き尽くされているのです。点を論じたら「今」を論ずることになり、「今」を論じたら三界を論ずることとなり、三界を論じたら天地宇宙を論ずることになる。だから一点が宇宙だと言うことにもなるのです。こうなると智慧で論じたものはすべからず智慧の分際に過ぎませんから、決して訣著することは有り得ません。参同契に「理に契うも又悟りに非ず」とあるでしょう。

ところが私達はこれを行ずる日常底でなければなりません。行ずることが仏法を具現していることなのです。つまり、学の世界ではないから知性や知識などは一切関わらない世界であり、それ故に一切の拘りも囚われもない、自由な「今」と現成している究極に行き着くのです。これが事実であり厳然として既に在る「道」「法」です。これが「今」の様子です。

要するに過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得とある通り、即ち捕まえようが無い「今」を、「只」行ずるだけです。探したり求めたり、理解しようとしたりする必要がないと言うことです。もともと「今」だからです。本当に素直になり、縁の俛に「只」在ればよいのです。この事を本当に体得するための坐禅であり修行なのです。

この逃げようのない「今」、絶対な「今」にみんな居るのだから、それを疑うな。意を勞して他に向

かつて探すな。と言うことであり、絶対に信じ尽くして心を持ち出すなと言うことです。「今」「只」有りの俛。縁の俛にということでは。

世話人・・・質問される方。ご自由にどうぞ。

老師・・・義光老師の門下で可成りのお年を召したお百姓さんが、一隻眼具したことによる人格一変のお話をしましょうか。

義光老師は境界もさることながら広島大学の講師もされていましたが学識の高い人でした。概ね学人は学者的な教養人ばかりでしたね。ですからその老人は何時も部屋の間でちっちゃくなっていたものです。ですが修行は真剣であり、仕事は自然が相手のお百姓さんですから至って単調な運びで、日常も成りきり成り切りを心してやっていたのです。とうとう底が抜ける時節が来たわけですよ。

私はと言えば生意気盛りの大学生でした。たまたま豊橋から帰った時が接心だったので即参加しました。最後の昼食は、ささやかながら劳いの会食でした。十四五人は居られたかな。一人ずつ自己紹介と感想を述べていました。その老人になりました。彼はすつくと立ち上がり、腰に両手を当てたその姿は威風堂々たるもので、既に敵無しといった豪胆さに見えましたね。

「今から、少林窟道場の産声を聞かせてやる。みんな良く聞け。」と厳かに言ったかと思ったら、大音声で、

「ムー！ 分かったか！」

渾身の一声は全員の煩惱を一呑みにしていました。この大見識は疑いようも変化しようもない真理に目覚めた自覚に拠るものです。明々白々の本当の「今」に目覚めた人の大力量底は、凡眼では計り知ることが出来ない世界です。生死透脱とも解脱とも言われている世界が如何に絶大であるかと言うことです。私はその自信力の大きさと、他を見ていない、目に立つ物が一切無い威厳に圧倒され、本当にびつくりしました。

見性してからというものは、玄関の真ん中に堂々と坐り、静かにウチワで涼を取っていたそうです。後ろで先生方が色々論じていたら、

「カバチ（くだらぬこと）を垂れず、真剣に坐禅せんか！」と檄をとばしていたとか。フンドシ一つで田んぼの草取りをしていた姿が今も私には印象的です。それは老尼と畑に向かって下りていく道中のことでした。

「老尼！ 裸はいいですよ！」と快活な老人。

「まだフンドシが残ってる！」と老尼。

「はっはっはっ。」と大笑する二人の英霊漢。

この解脱の消息は瞬間のもので、これを体得するのです。六祖が「迷い来たらば累劫を経るも、悟る時は刹那也」と言われたのはこの事です。真つ暗い部屋に電灯が灯ったようなものです。その瞬間、一切がはっきりするから手探りする愚はしないし、柱にデコをぶっつけることも無くなるでしょう。無明と光明の違いです。この明らかな消息を見性と言いつつ悟りというのです。

悟後の修行はここからの修行を言うのです。悟るべきものはや何も有りませんでしょう。何も無いという者、悟ったという者を落としていくのです。これが聖胎長養です。本当の「只」をどこまでも練っていくのです。

先ず目指すべきは、真箇「今」に成りきり、身心一如そのものを体得すること。要するに我れを忘れ切るまでその物に徹することです。見聞覚知、眼耳鼻舌身意が全自己として目覚めることです。一心に成りきり切る。本当に一心に徹すると一心も無くなる。これが脱落であり解脱です。これを一隻眼を具したというのです。それまでは迷いの人だという事を忘れずに、兎に角徹底するまで一心不乱に、真実

に只管を錬ることで、一呼吸に成り切るのです。行き着けば必ずからはつきりするので、道理や理屈を追究しないことです。

この道は自得底ですから、「隔たり」が取れて身心一如になれば人智が介在しない。「道」「法」が明らかになるのです。それを師匠に点検証明をして貰えば、平成の祖師となるのです。許されなければ本道の「道」「法」ではない。本当に徹していないから真相に目覚めた自覚ではないと言います。更に参ぜよ三十年とばかり、即今底で努力するのです。

永嘉大師はお経を読むばかりになって、一期に徹し切ったでしょう。「今」を離さず、徹し切ったら「只」に至るのです。それが本当であつたら結論です。「俺はやったぞ！」と自得底を豪語し、金剛経そのままの人に成った。一人欣喜雀躍していたら、法友の玄策が、「自分悟りは誰が認めるものか。正師の印證が無ければ天然外道だ。」と言われて六祖に会いに行つたでしょう。

六祖はその境界の素晴らしさを絶賛されて、「善哉。善哉。」と証明しましたね。この点検証明が有るか無いかで、真実の法であるか否か。大切な分かれ道です。これが禅の命脈であり、又禅の本領です。永嘉大師はいきなり差別智に生まれ出た稀有の祖師です。中にはこのようにいきなりぶち抜く人も居ると。只そうした人は希でしか在りません。

六祖はどうであつたかという、日常が既に単のままであつた人です。気付かずして身心一如の生活だつたのです。自己無く縁の俛に「只」していた人です。だから娑婆往来五百生と言われているのです。商いが終わって帰ろうとした時の、「応無所住而生其心」の句が縁となり、根底からスカツと訣著が付いた人です。この人も、ですから一度で徹し切った祖師なのです。更に八ヶ月間、只管のぶつ通しをされますね。將に悟後の修行であり聖胎長養です。正師のもとを離れて更に十五年間、世間に伍して錬られたでしょう。その境界が如何に高かつたかは、やはり修行力に由るものです。

参禅者B・・・ もう一つ質問が在ります。山上尚山有り、と言われています。心得としては如何様に理解するのが宜しいでしょうか。

老師・・・ やはり努力をどこまでも怠るなど言うことです。

参禅者B・・・ 老師でもやはり坐禅を続けなければ駄目なのではないでしょうか？

老師・・・ 駄目とか何とかではなく、それが道じゃから。日常からは誰も離れられないでしょう。義光老師・大智老尼・義衍老師等各祖師の警咳に長く触れてきました。義光老師におかれては、日常何でもない字を書くにも、一点一画を心して書かれていました。老尼も同様に、一箸の油断すらすることなく単の俛に、自己無き処を徹底錬っていました。勿論自由自在に、速度など一切関係なく「只」していたということです。錬る必要が無いところに至って、尚道を道として行ずるのが真の道人です。これが「山上尚山有り」として「今」を「今」で磨いていくのです。錬れば錬るほど道が深くなるのです。大燈国師の遺偈に有るでしょう。

仏祖裁断して、吹毛常に磨し。機輪転ずる処、虚空牙を嚙む。

仏祖も用のないところまで徹底尽くしきつた境界でも、尚常に「道」「法」として「今」を行じて居る。そうであればこそこの様な縁に遇おうとも、一切道となり言うことも思ふこともない、真実無我の当体全是となるのです。吹毛剣とは、刀の刃に鳥の羽が乗り、それをふつと吹いただけでスカツと切れるほどの完璧な剣、悟りの明晰さのことです。それでも尚とぎ澄ますこと。尚只管を錬っていくと云うことです。それが「山上尚山有り」と言う意であり、道人の心得です。小成に安じてはならないの意味です。悟っても悟らなくても、とにかく常に「今」を大切に、「只」を錬ることは道人の日常でなくてはなりません。

そうなると悟っていないなくても、「今」を本當に行持しておれば立派な道人であり、仏祖の位に列して

いるも同然と言うことになるでしょう。言うなれば、既に「今」そのものの時節が来た人が悟った人。未だ時節が来ていない未悟ではあるが道人と言うわけです。「今」そのものが「道」「法」であり、常に時節ですから、努力さえしておれば何時時節が有るか分からない。油断をせずに「今」努力する人であることが最も大切なことです。

どんな深い気付きや体験が有っても、それを持ってしまったら道に傷を付けてしまうのです。ですから決して腰を掛けないことです。菩提心、菩提心。

さて、今年の締めくくりとして、研参努力の功德が生活の中で感じられたかどうか。どなたか。

参禅者C・・ はい、では。本もと何故修行するのか、となりますと、やはり苦しいからです。ずっと苦しんできました。お陰様で今は「今」の平安があります。努力の結果でしょうか。只、とても悟りというレベルではありませんので、研参怠りなくやっっていくつもりです。先程おっしゃられた通り、努力するのみです。有り難うございました。

老師・・ みなさん殆どの方が、当たられども遠からずだと思えます。着眼点のはっきりしている人ばかりですから、今後ともどれほど日常で工夫するかです。要するに菩提心であり志次第と言うことです。「今」です。来年も「今」ですから、大いに菩提心でやって下さい。

世話人・・ 時間が参りました。老師には今年一年、大変お世話になりました。御法愛有り難うございました。

平成十八年十二月九日